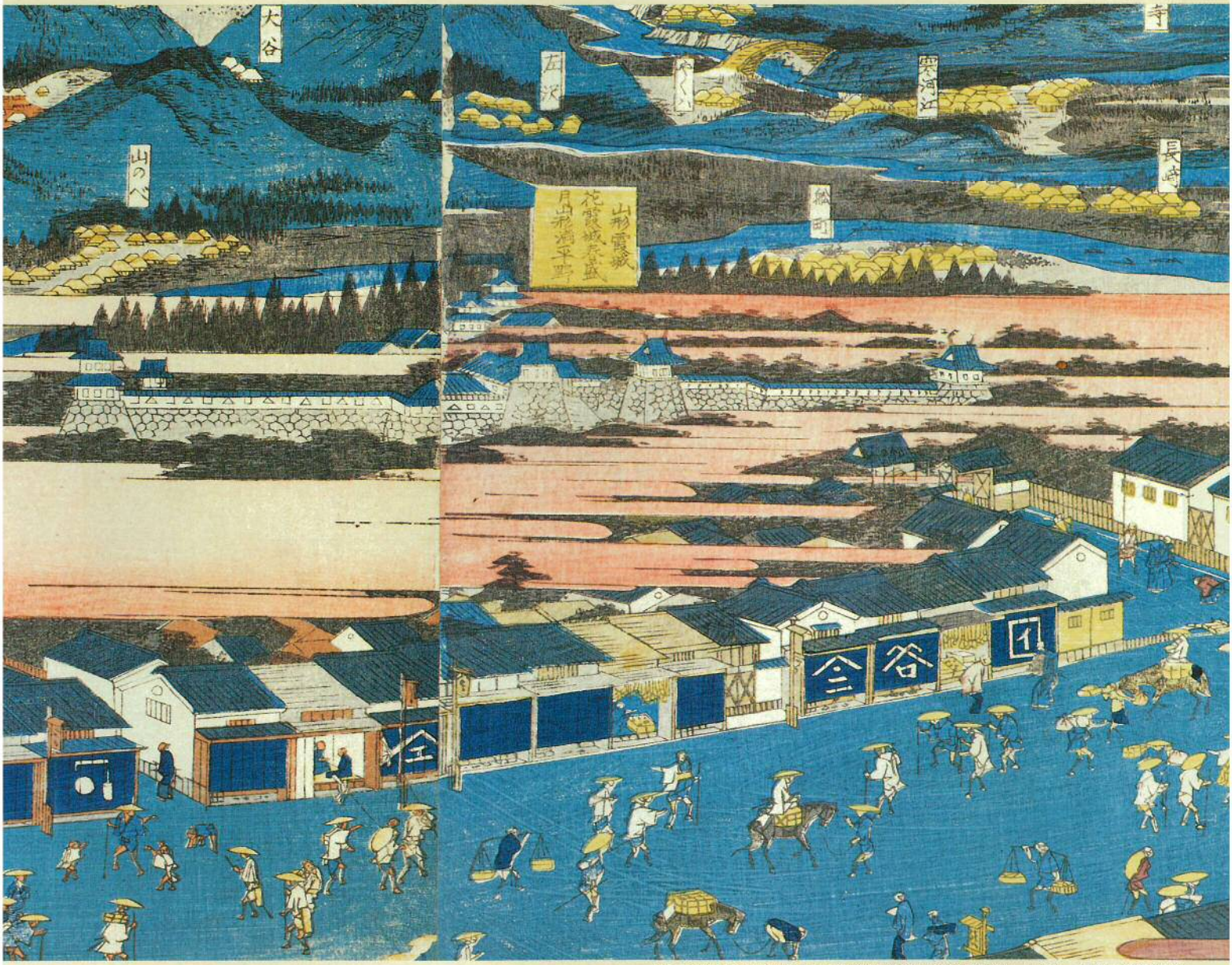
歴史館だより

財団法人最上義光歴史館 Vol.5 平成10年3月発行



江戸時代の山形城と町の姿(「湯殿山道中絵図」より)・山形美術館蔵

歴史館の役割と山形

山形大学名誉教授
文学博士
横山昭男

歴史を忘れた国は亡びるという言葉がある。日本国内でも、近年市町村自治体で博物館や歴史資料館をもつところが多くなっている。その設立事情はいろいろであるが、立脚する地域の歴史文化の特性を学ぶ拠点として、地域振興の一つの核として期待されているのである。

本館もその歴史は浅いが、山形の基礎を築いた最上義光を中心とする山形の歴史文化の粋を集めて常設展を開くと共に、企画展では山形県域郭古絵図展や戦国武将墨跡展などを催し、広く東北、県内各地の博物館、美術館の協力を得て、優れた文化財の展観にも供してきた。

しかし歴史館が、地域の歴史文化を学ぶ拠点として、常に存在感を維持するためには、展示内容の検討や新しい企画展に充分な準備を行うことが必要である。仲間との情報交流を積極的に進めるとともに、山形の文化発信の基地として誇れるような、歴史館の一層の充実を期したいものである。

義光と「源氏物語」

――慶長三年卯月十九日興行の連歌から――

山形大学教育学部助教授　名子　喜久雄

はじめに

一昨年の一月に歴史館主催の「最上義光についてのシンポジウム」が行われた。その折、義光の文事について一面を述べることが出来た。さらに、昨年には一月中旬から四週にわたって、義光の慶長三年卯月十九日に巻かれた連歌を講ずる催しが歴史館によって行なわれた。ここで、やや本格的に義光の古典文学についての教養を論ずることが出来たように思われた。

そこで、紙幅とのかかわりもあり、すべてを論ずることは不可能であるので、その折に明らかになった義光の連歌と「源氏物語」との関連を中心として、義光の古典文学理解を解明してみたい。

本連歌成立の背景

その前に、この連歌の成立の背景を述べておきたい。この連歌のメンバーの多くはプロの連歌師であるが、その総帥とも言うべき人物が里村紹巴であった。義光と紹巴の交流がいつ始ったかは不明である。ただ、三年前の文禄四年（一五九五）に、両者は秀吉による秀次の追放・自害の影響を多大に蒙った。義光が愛娘駒姫を死なせたことは著名だが、紹巴も秀次にも近侍していたため、近江国三井寺に追放されてしまう。

紹巴は、慶長二年（一五九七）秋に許されて帰洛する。それを歓迎して行なわれた連歌の一つに義光は出席している。二人の縁の深さを思うべきであろう。

（ちなみにこの連歌懐紙の新出の写本が、このたび歴史館に収蔵されることになったのは、喜ばしいことである。）

発句と脇句に見る「源氏」の面影

その二人によって発句と脇句が詠まれる。

1　折る花のあとや月見る　　義光
　　夏木立
2　御簾のみとりに
　　明やすき山　　紹巴

この連歌は旧暦四月十九日に行われたこと、また発句は、目前の景を詠むとの約束から、義光の発句の後半部の大意は、「夏の夜、青葉の木々を眺め遅い月の出を迎えた」などとなろう。ただ「折る花の」が何を指しているのか、問題は残る。「夏木立」となる前の春の光景とも解せるのだが、やや想像をたくましくすれば、約一ケ月前に行なわれた秀吉晩年の最大の風雅の行事、醍醐の花見を追想しての表現と考えたいのである。すなわち、義光の発句の大意は、「醍醐の花見の華やかさを味わった後、ここに夏の青葉の木立の中、夏の月を眺める席を設けることができた」となろうか。

これに紹巴は脇句を付ける。その大意は（花の季節の後夏木立に囲まれた家で一夜月を眺めて夜を明かし）御簾の内から観察すると、夏の短夜はすでに東の山のはの空の色が変っている」となる。初夏、風雅の思いに身をまかせて夜明しをした貴人（貴女）の姿が描かれている。「夏木立」の語から考えると、「源氏物語・花散里」の世界を面影にした（古歌・物語を典拠とする時、はっきりとではなく、かすかに示すこと）ものと考えたい。

弘徽殿女御からの圧迫に耐えかねて源氏は須磨への退去を決意する。そのような、心あわただしい中、間奏曲のように、一夜の光源氏の夜歩きが行なわれる。「ささやかなる家の木立などよしばめるに、よく鳴る琴を」弾いていた門前に源氏はたたずむ。しかし案内を乞うても応答はなく、仕方なく源氏は愛人の一人花散里の許へむかうこととなる。その邸の風情は、

二十日の月さし出るほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて

との状況であった。

直接的に「夏木立」の語はないが、「初夏、木影から月を眺める」との義光の句を、紹巴は「源氏」の世界にとりなして、その貴婦人たちの夜明しの様としたのであった。言い換えれば、紹巴の解釈を導く「源氏物語」との共通性が義光の発句に、顕らかな形ではないが、内在していたことになろうか。

義光の「源氏物語」への傾倒

義光の「源氏」への傾倒は、他にも見られる。以下の如き付け合いがある。

20　おなじはちすとなを
　　ちぎらばや　紹由
21　あひおもふこころはさらに
　　あさからず　喜吽
22　ひめおきつつも
　　ゆるす法の師　紹巴
23　つねにしもかよひ
　　なれたる古寺に　義光

20は、仏教の教理に立って、「共に極楽往生を求める」ことが大意である。それを21で喜吽は、恋にとりなして、「相思う男女の契りの言葉」としている。（喜吽は義光の家臣で、この連歌で山形側の人物として、義光の外に確認できる唯一の人物。）

22は、それを受けている。「法の師」とあって、一見すると仏教の立場からの句と思われるが、おそらく、以下の「源氏物語・椎本」の一部分を面影としているのであろう。

「宇治十帖」の男主人公薫は、自己の出生に疑念を抱く内省的な人物として描かれる。薫は、源氏に圧倒された不遇な生涯を送った宇治の八宮と、仏道への関心を通じて知り合った。八宮は、自分の死の近きを悟り、仏道専念のほだしとなっていた二人の愛娘を、（妻は次女「中君」を生んですぐに没）自分を「法の師」として慕っていた薫に委ねることにする。具体的には、薫が、その中の一人を妻としてくれることを望むこととなる。―(1)

八宮は、その後、常々通って心を澄ませていた山寺に登り、死を迎えるのである。―(2)

紹巴は、21の喜吽の句から、「八宮・薫」・「薫・大宮」の「あひおもふこころ」を感じとり、「源氏・椎本」の巻に拠った句（具体的には(1)までの部分を拠り所とする）を付けたことになる。

義光の句は、さらに(2)までの部分に立っていることは改めて説くまでもなかろう。すなわち、義光は、紹巴が「源氏・椎本」に拠って作句したことを即座に理会して同じく「源氏」に立脚した23を創造したのであった。

古典世界への通暁のあかし

このような例は、この部分に留まらない。以下の付け合いにも、「源氏」は影響を与えていると考える。

83　さき立つを道のしるべの
　　雪の暮　景敏
84　すみかのかたは
　　駒いばふなり　玄仍
85　程もなく賀茂のまつりや
　　過ぬらん　義光
86　いまもみそぎに
　　思ふそのかみ　昌叱

84は、「83の『雪の夕暮の中、先立った旅人の足跡を道しるべ』として進む辛い旅を一行の中の馬も、故郷の方をむいて、つい辛さのためにいななく」ほどの大意だが、「文選・古詩」の「胡馬は寒風に嘶き　越鳥は南枝に巣くふ」に依っている。遠く離れた故郷への思いを述べた羈旅の句である。

85は、「おそらく都の中で邸内に世俗を離れて生きる人物（貴女）が、かつての家の近くの通りを人々が馬を乗って通るのをかすかに聞いた体」ととらえて、「馬が多くパレードを行なう、賀茂祭ももうじき終ってしまうか」と嘆じた体の作句となっている。

86は、さらにその方向性にピントが合って、その貴女（皇族）が、自分がかつて、賀茂神社に朝廷より遣される斎院であったことを賀茂祭の御禊の日に当って回想する体の句となっている。

84をかつての住いの紫野の斎院の近くの馬の嘶きととらえた85の義光の句の世界を、86が会得して作句したこととなる。

源氏物語に特定しなくとも良いのかもしれないが（例えば、大斎院選子内親王や、「狭衣物語」の源氏宮のことが面影と考えるのも許されよう。しかし、いずれにせよ、義光の古典世界への通暁のあかしとなろう）「朝顔」の女主人公たる朝顔の斎院を思い起こさせるものがある。

朝顔は、斎院を退いた後葵上没後の源氏の正妻の候補となる。源氏も文を送るが朝顔は結婚せずに生きて行く。こんな人物の面影による付け合いであろう。

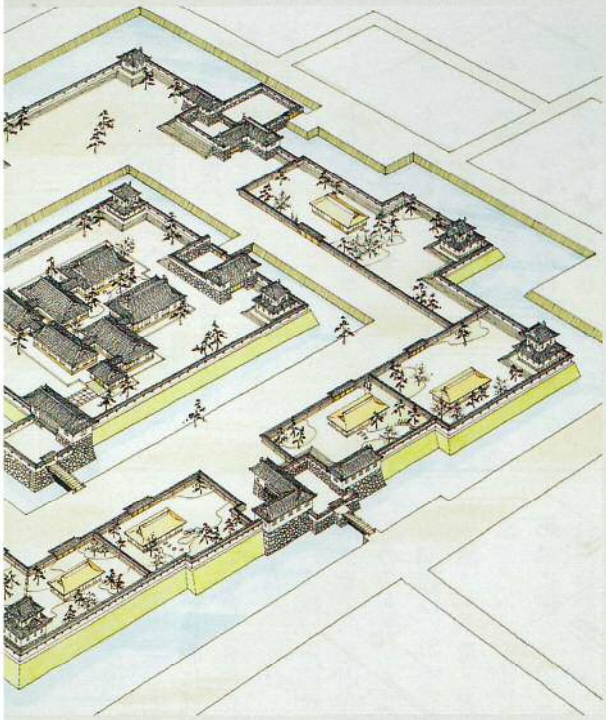
以上、様々に関わりのあり方は異なるが、いずれも「源氏」が関与した句作・付け合いである。

継承された好文の性質

やや、検討を急いだが、こうして見ると、義光の「源氏」理解の並々ならぬことがわかって来よう。紹巴と深い交流を結びえた天正十八年（一五九〇）以前の山形の地を離れえなかった時の師は、誰か、不明なのが残念である。

なお、このような義光の好文の姿は後継者の家親にも継承されている。「山形市史」所収の「三部抄」奥書からは、慶長元年（一五九六）に紹巴筆写の定家著「詠歌大概」を送られている。その奥書に「最上之本所義光御三男家親、頃風雅御執心之由及承」とある。（傍点筆者）義光の好文の性質は継承されていたのであった。

（註）※の句「山形市史」は「古簾」であるが、「古」は「御」の誤写として考察を進めた。



を描いたもの。

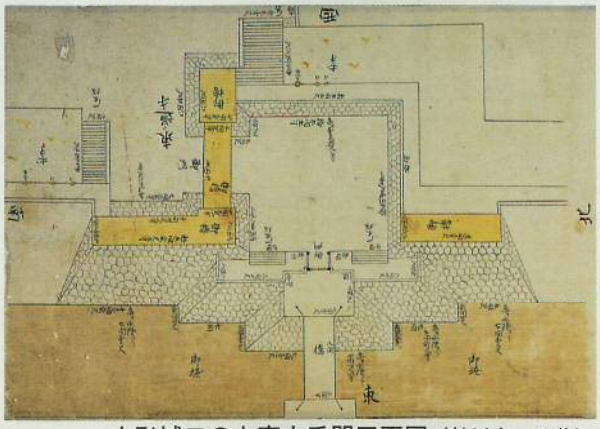
明治初年の山形城二の丸東大手門
山形の写真の先覚者 菊地新学撮影

山形城のシャチ瓦
（左、山形市郷土館蔵；右、山形市立第一小学校蔵）

山形城と城下町の面影

特別企画展 展示資料より

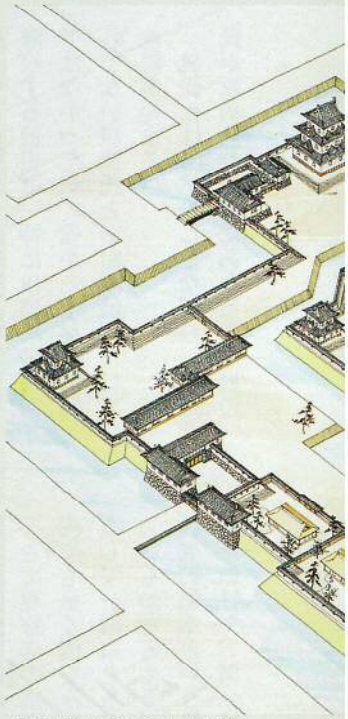
近衛少将・出羽守、五十七万石の大守
最上義光が構築した山形城。
その創設からすでに四〇〇年
城主は幾度も変わり、明治時代には
城郭は完全に取り壊されてしまいました。
町の姿も、大きく変わりましたが



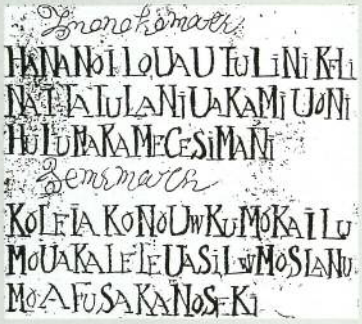
山形城二の丸東大手門平面図（粕川令二氏蔵）
現東大手門復元に際して基本資料とされた。

秋元氏は毎年４月、このような調練行列で山形城下を練り歩いた。天保15年（1844）、土谷朋月（本名善兵衛）が16歳のとき描いたもの。

ローマ字綴り
百人一首絵馬
（小白川天満宮蔵）
秋元藩医師長沢周玄の門下生、大木朝栄が、小白川町天満宮に奉納したもの。



17世紀中頃の山形城
正保城絵図をもとにして、およその



〈小野小町、蝉丸の部分〉

おののこまち
はなのいろわ　うつりにけり
な　いたつらに　わかみよに
ふる　なかめせしまに

小野小町
花の色は移りにけりないたづらに　我が身世にふるなかめせし間に

せみまる
これやこの　ゆくもかいる
も　わかれてわ　しるもしらぬ
も　あふさかのせき

蝉丸
これやこの行くも帰るも別れては　知るも知らぬも逢坂の関

〈右の読み〉

すぐれた文化を創造してきました。
その面影をたずねた展示のごく一部を
採録しました。

羽州山形十日町跡（市神）
山形城下の商業の中心地だった。

幕末の十日町［版画］（武田慎市氏蔵）
山形城三の丸土手の木立が奥に見える。

秋元藩調練行列絵巻・部分（土谷明彦氏蔵）

〈御殿様〉

専称寺とその塔頭（たっちゅう）

元山形県立図書館長　森山　憲治郎

専称寺が今の場所に建ったのは、慶長元年である。この年、最上義光五十歳、その版図は村山郡に約二十四万石、奥羽（現在の東北地方）では会津蒲生氏九十万石、仙台伊達氏五十八万石に次ぐ大名であった。

定説に従えば、義光は愛娘駒姫の菩提を弔うため、高櫓から寺基を山形に移させたという。しかし義光は、同じ年に自らの菩提寺として光禅寺を三日町に建立している。なぜ駒姫をこの光禅寺へ葬ることが出来なかったのか。どうして駒姫の菩提寺が専称寺でなければならなかったのだろうか。これらの疑問を解く前に、この頃の時代背景をみると、豊臣秀吉が天下を統一したとはいえ、文禄慶長の役の最中であり、まだ戦国の世であった。

豊臣政権も後継者が幼く確たるものとは言えず、いつまた乱世に戻るかもしれない時代だったのである。従ってこの頃の義光の最大関心事は、隣接する仮想敵、特に伊達氏の動向ではなかったか。僅か二十里しか離れてない伊達氏との距離は、二日で攻防が始まる。

義光には当然のことながら、伊達氏が攻め込む道筋にあたる山形城の東部を防備する必要があった。即ち小白川街道と城下（当時）の接点である。まずこの地に前進防御陣地を構想し、戦国武将が等しく採った手法に倣い、複数の寺院を建立することとした。これが「寺内」の発祥である。

出城を造ることは相手方を刺戟するが、寺院ならば信仰という大義名分があった。

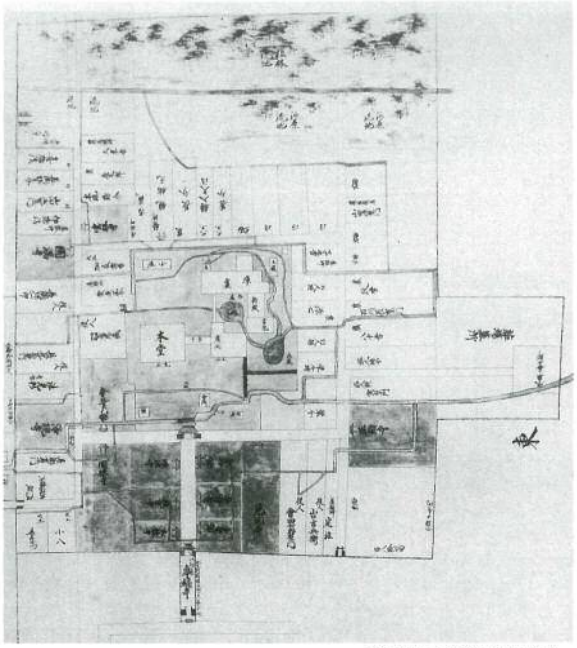
近世城下町の形成では、その城の弱点を補強する手段として寺が整備されてきている。米沢の東寺町や北寺町がそれで、鶴岡は酒井忠勝の時代になってなお寺に固執し、三の丸の外周に広済寺など約三十ヶ寺を建立した。仙台も同じく、現仙台駅の東に連坊小路を築き、防御陣地兼兵站基地としている。伊達政宗はそれに加えて墓石の規格を統一し、一旦緩急の際は石壘とすることまで徹底したのは有名。松島の瑞厳寺もその類というが、故なしとはしない。

さて専称寺の塔頭十三ヶ寺は、県内でも全く例をみない規模であり、まして一向宗ともなれば全国的に珍しいものと云える。この塔頭整備は義光の領主という強権によってなされたわけで、例へば唯法寺は最上高湯にあったものを移転させられた。従ってそれ以降、蔵王温泉に寺はなく、葬儀は山形まで来なければならなくなった。同じく願重寺は鉄砲町から移転したもの等々、最初から現在地に建立したのは正願寺などであり、ほかに寺役人、大工、百姓等の一山を維持経営するための在家が集合して「寺内」を形成した。

義光の宗教保護政策は一向宗に限らず、慈恩寺や羽黒山、光明寺（時宗）、竜門寺（曹洞宗）、光禅寺（禅宗）、浄光寺（日蓮宗）、常念寺（浄土宗）などのほか、幅広い宗派と神社にまで及び、その寄進地は一万三千石弱、百ヶ寺社を数える。（慶長十八年）

この時代、宗教のもつ力は大きく、大名と雖も命を賭けて神仏の加護を願った。同時に織田信長や徳川家康が一向一揆で苦しめられたのを教訓に、領国経営の上から宗門に結合する門徒の力を殺（そ）ぐことにも腐心している。そのため義光は、寺社に対する保護助長政策を積極的にとって宗教の統制を狙い、領民の精神面の統治をも果たそうとした。専称寺とその塔頭の建立は、前記の出城構想と統治理念が偶々合致したに過ぎなく、駒姫の菩提寺は特定される必然性はなかったものと考える。義光夫人の天童氏が熱心な一向宗信者であり、その信心に義光が動かされたとする説もあるが、説得力は弱いように思う。

いずれにせよ最上義光については、まだ解明されてない点が多すぎる。しかし客観的にみて、同時代に生きた他の領主と比較した場合に、義光は「仕事」をした部類にはいるのではないか。専称寺の塔頭はその一例に過ぎず、城下町づくり、新田開発等々、題材は数多くある。これから、より多くの方々が義光研究＝山形研究に取組まれることを期待したい。



幕末頃の専称寺寺域図

『歴史講座』で学んだこと

佐藤和子

私の実家の菩提寺は、斯波兼頼公が祠られている七日町の光明寺です。一昨年、母が九十四歳の長い生涯を閉じ、母の墓参に足しげく光明寺を訪れるようになりました。そのたびに、ご住職や奥様とお話をする機会も多くなり、光明寺にまつわる由来や変遷など興味深いお話しをお伺いすることができました。

最上家の初代領主である斯波兼頼公の墓、兼頼公を模したといわれる木像、その時代の山形城下町絵図などを拝見させていただくにつれ、昔の山形の姿をもっと知りたいという気持ちが芽生え、最上義光歴史館にも何度か足を運ぶようになりました。収蔵品の数々にその時代をしのぶひとときは、悠久の時の流れを感じ、ゆったりとした気分になってきます。

そんな時に、市報で『最上義光の連歌を写本で読もう』という歴史講座のあることを知りました。「最上義光が連歌?」と、ちょっと戸惑いましたが、それだけにどんなつながりがあるのか興味を引かれ、思いきって友人と二人で受講することにしました。

私が戸惑ったように山形の人の多くは、義光公と連歌のつながりには首をかしげられる方が多いのではないでしょうか。義光公といえば、百戦練磨の戦国武将、長男義康の殺害、哀れ幼くして生涯を閉じた駒姫とのかかわりなど、残忍無慈悲な面のみが強く印象づけられているように思います。ところが、その義光公が晩年には京都で、近世にまで名を残す連歌の第一人者であった里村紹巴、里村昌叱を始めとする上流文化人と伍して、連歌を楽しんでいたというのです。文化人としての義光公に光を当てたこのたびの歴史講座は、私にとって実に新鮮でした。

慶長二年八月七日、京都で開かれた連歌会に義光公が参加した時の、義光公研究に欠かせぬ写本が見つかり、山形市で購入したことも伺いました。当時の中央の権力者や文化人との交流も盛んで、その写本から推察すると、歌の道のみならず『源氏物語』をはじめとする古典文学の世界にも通じていたと思われる義光公。鎧兜を脱ぎ捨てて、烏帽子に直垂姿、扇子を手に、付け句の想を練りながら正座している、色白の義光公を想像してみるのもなんと楽しいことではありませんか。知略と武力にたけ、中央との交流を巧みに生かし、最盛期には当時の五大大名にまで数えられるようになった義光公ですが、その胸の内にはきっと古典文学で培った感性を秘めていたに違いありません。新しい視点からとらえ直すことで、義光公の人柄が一新された感じがいたします。

ところで、山形城の築城は、最上氏の祖である斯波兼頼公によって始められ、最上氏の隆盛とともに城の拡張と城下町作りが行われて、現在の山形市の基礎が作られたと聞いております。義光公も領主として、城下町山形の発展を願い、町作りに力を傾注されたことでしょう。七日町、旅篭町、肴町、銅町、といった町名や町割りにも、城下町の往時がしのばれます。

しかし、職人町通りの名称がしだいに忘れつつあることは、何か寂しい思いがいたします。蝋燭町、桶町、桧物町、塗師町、銀町、鍛冶町といった名称からは、その町に住む職人の家並が見え、暮らしの音までもなつかしく聞こえてくるように感じられたものですが、時代の流れの中で仕方のないこととは思いますが、義光公の広大な城下町作りをしのび、その意思を継承していくためにも、職人町通りの名称を復活してみてはどうかなどと、一人思いをめぐらしています。

戦国武将、領主、文化人として、多方面に人間味あふれる功績を残した義光公の姿を、二十一世紀の山形を築く若人達に、ぜひ伝えていきたいと願っています。このたびの歴史講座のような催しが、そうした活動の一端を担ってくれるものと期待しております。

（主婦・山形市荒楯町）

光明寺本「一遍上人絵巻」部分

短歌

虎将・最上義光を想う

藻川短歌会代表　佐藤隆之

薄明の出羽の国に曙の光もたらせし虎将義光

戦いにいたて負いたる将兵をいたわる手紙今に残れる

古き文あまた学びて貴人と連ねし歌のゆかしくもあるか

百年を土に埋もれし本丸の石垣の石を踏みて我が立つ

すでにして四百年の年は過ぎ城の土塁に曼珠沙華紅し

発掘された本丸の石垣

平成10年度の計画

本年度は、事業のなかで様々な試みを取り入れました。

これまでどおり山形市民を対象とした講座を開催しながら、上山市と山辺町にも講座の場を設け、地元の方々に大変なご好評をいただきました。

また、特別企画展では、人物や時代等にとらわれず、テーマを山形城と城下町とし、最上家在城時代から幕末・明治までの文化や歴史を幅広く紹介いたしました。

平成十年度も歴史講座やこども講座、特別企画展など、本年度同様に様々に工夫をこらし、皆様のご要望にお応えできるよう企画していきたいと考えております。

■特別企画展 山形の歴史と産物（仮題）

山形は「紅花」「漆」「青苧」等に代表される特産品が数多くありました。それらは山形の歴史や風土と密接なつながりをもち、地域の特殊性を顕著に表します。

この度の展覧会では、山形の風土と産物の関係やそれに係わる歴史と文化について幅広く紹介いたします。

（平成十年九月中旬開催予定）

歴史講座

山形の歴史や最上家のこと、山形に残る優れた文化財などについて、広く学んでいただけるよう、企画準備しております。

また、本年度同様に山形市以外での移動講座も企画しております。

詳細は、「広報やまがた」や関係市町の広報紙で後日お知らせいたします。

こども講座

こどもたちの郷土の歴史に対する関心と理解を深めるため、今年も社会科の先生方のご協力をいただいて開催いたします。

詳細は、「広報やまがた」で後日お知らせいたします。

（平成十年十月開講予定）

最上家関係資料調査

最上家や山形の歴史に係わる史料や文化財、史跡などの調査研究を進め、最上氏研究の中心的機関になるよう努めています。

《ご協力のお願い》

最上家に係わるものをお持ちの方、最上家に係わる資料をご存じの方ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を知るための資料を探しております。今後の研究に役立てたいと思います。よろしくご協力ください。

連絡先
財団法人最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-53
☎023-625-7101
FAX023-625-7102

新収蔵品の紹介

玄仍七百韻其他（げんじょうしちひゃくいんそのほか） 一帖

紙本墨書　縦一七・〇cm　横二三・七cm

平成九年三月に山形市が購入し、当館に収蔵されました。

江戸時代初期の写本で、八種の連歌を収めたものです。なかでも慶長二年（一五九七）八月七日興行の「何路百韻」では、最上義光が当代随一の連歌師里村紹巴や、文化人・風流人として名高い細川幽斎、前田玄以等とともに連衆として一座した事実が明らかになりました。このことから、当時義光は一流の文化人として評価されていたことがわかります。また、義光が詠んだ七句は他の連衆に引けを取らない優れたものです。義光が豊かな古典的教養をもっていたことがうかがわれる貴重な資料です。

平成9年度のあゆみ

4月21日　会沢金山遺跡調査
5月26日　平成九年度第一回理事会
　　第一回評議員会
　　第二回理事会
6月17日　館内くん蒸作業のため臨時休館（22日まで延6日間）
21日　■歴史講座「歴史セミナー・かみのやま」（於上山市／受講者八〇名）講師 横山昭男先生・木村昭一先生
7月19日　■歴史講座「歴史セミナー・やまのべ」（於山辺町／受講者六二名）講師 横山昭男先生・後藤禮三先生
7月27日　市政施行一〇八周年記念無料開放（入館者二八三名）
9月14日　■特別企画展「山形城と城下町の面影」開展（会期10月19日まで　延入館者三、五一六名）
10月11日　■こども講座「やまがたの歴史」（参加者一八名）
11月3日　文化の日無料開放（入館者三三二名）
11月22日　会沢金山遺跡調査
12月4日　車椅子用スロープ設置
12月24日　平成九年度第一回運営懇談会
1月16日　■歴史講座「最上義光の連歌を写本で読もう」（16・17・18日／受講者二九名）
2月3日　第二回評議員会
2月13日　第三回理事会
　　■歴史講座「山形の歴史を知ろう」（13・14・15日／受講者三六名）講師 茨城光裕先生・蒼田慶信先生・川瀬同先生
2月21日　平成九年度第一回資料整備検討委員会
3月26日　平成九年度第三回評議員会
　　平成九年度第四回理事会

ご利用について

●開館時間　午前9：00から午後4：30
●入館料　一般 大人300円　高校生200円　小・中学生100円
　団体 大人240円　高校生160円　小・中学生80円
●休館日　月曜日（国民の祝日と重なる場合はその翌日）　12月29日から1月3日
●交通　JR山形駅より徒歩約10分　大手町バス停留所より徒歩1分

山形市大手町1-53
TEL023-625-7101
FAX023-625-7102